

第2回『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

1、付き合っていくうえで

前回、「自立」ということについていろいろ考えてみました。障がいに基づく生活上の種々の困難を改善・克服するためには、本人の力を伸ばしていくと同時に、環境を整える必要があるのではないかと、その考え方を述べました。障がいに基づく生活上の困難を、双方の力で改善し克服するようように考えていかなければならないということになると思います。これを実現するためには、障がいのあるその人がもっている特性を本人と周囲の人が理解したうえで、付き合っていくという発想が必要になるのではないのでしょうか。

ところで、周囲の人がその人を理解し、付き合っていくためには、どのようなことが大切になるでしょうか。

その人とコミュニケーションとることが大切になるのです。相手のことを理解するためには、コミュニケーションできなければならないのです。

そこで、今回は障がいのある人たちにわかるように伝えるための工夫について考えてみたいと思います。わからない世界でいることを強要することは心理的な虐待になるのではないかと思います。障がいの有無に関わらず、わかるように伝えることは大切なのです。わかるように伝える工夫ができてはじめて、その人の「自立」のための支援の一步が始まると思うのです。わかるように伝えるためには、その人がどのように考えているのかを知る必要があります。

例えば、こんな時に参考になるのは、障がいをもっていらっしゃるご本人が書かれた本などですね。

ここでは、自閉症のある人たちが書かれた本から探してみましよう。

「言われたことをおかしなふうに誤解してしまったり、全く意味が分からないままだったりする。」

(ドナ・ウイリアムズー「自閉症だった私へ」)

「絵で考えるのが、私のやり方である。言葉は私にとって第二言語のようなもので、私は話し言葉や文字を、音声付きカラー映画に翻訳して、ビデオを見るように、その内容を頭の中を追っていく。」

(テンプル・グランディンー「自閉症の才能開発」)

「私の場合、言葉で説明を聞いても、頭の中で絵にならなければ、どこかへ飛んで行ってしまおう。」

(グニラ・ガーランドー「ずっと普通になりたかった。」)

「私にとっては、書かれたことばの方が、話されることばよりもずっとわかりやすい。」

(ウェンディ・ローソンー「私の障害、私の個性。」)

「ぼくがふつうじゃないところは、人が話しかけてくると、しゃべっている言葉が文章になって見えるところ。」

(ケネス・ホール「ぼくのアスペルガー症候群」)

このように、自閉症のある人たちが書いた本からわかることは、自閉症のある人の場合、聴覚から入ってくる情報を処理することが苦手な人が多いということと、視覚的な情報に置き換えて理解するようにしている人が多いということです。このような情報を生かしながら、わかりやすい環境を作っていくということが大切なのです。

では、わかるように伝えるためにどうするのか。次回から考えてみたいと思います。